

# 日本人初級英語学習者の Writing における 'because' の使用傾向

立川 研一

The Tendency of the use of 'BECAUSE' in the writing  
of Japanese Novice Learners of English

TATSUKAWA, Kenichi

大分大学教育学部研究紀要 第41巻第2号

2020年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 41, No. 2, March 2020

OITA, JAPAN

# 日本人初級英語学習者の Writing における 'because' の使用傾向

立川 研一\*

【要旨】 日本人初級学習者は、「理由」を表す接続詞として **because** を好んで使用することが知られている。また、中学生や高校生の従属接続詞 '**because**' の使用については、母語話者とは異なった使用傾向や誤用がしばしば見られる。本稿では、日本人学習者コーパスと母語話者コーパスを比較し、日本人初級学習者の **because** の使用傾向や誤用について調査しその原因の分析を行う。併せて、小・中学校や高校における、より適切なインプットや指導の在り方について提案する。

【キーワード】 日本人初級学習者 **because** 従属接続詞 コーパス

## 1 問題と目的

中学校や高等学校で **Writing** による自己表現活動の指導をする際、学習者に「事実」とその「根拠や理由」を述べるよう指導する。多くの学習者は「理由」を表す接続詞として **because** を知っており、それを好んで使用する。この傾向は投野 (2007: 91) や Fujiwara (2003: 97) によって確認されているが、初期の学習者であればあるほど、それがより顕著であることは、中学校英語教諭としての経験上、容易に予測される。また、前述の先行研究によると、中学生や高校生の英作文には、**because** を過度に文頭に用いるなど、母語話者とは異なった使用傾向があることが指摘されている。

そこで本稿では、日本人学習者コーパスと母語話者コーパスを比較し、日本人学習者の **because** の使用に関する以下の特徴的な傾向や誤用について改めて調査・分析を行う。

1. **because** を文頭に使用する傾向
  - (1) 通常従属節として後置される **because** 節を文頭に前置する傾向
  - (2) **Because** で始めて従属節だけで文を終える誤用
2. 上記以外の、日本語からの干渉と思われる使用傾向や誤用

また、調査・分析の結果を踏まえ、中学校や高校における、**because** のインプットの在り方や指導の留意点について提起することを目的とする。

なお、「1. (2) Because で始めて従属節だけで文を終える」のは、話し言葉の中の"Why?"に対する受け答えとしては有効であるが、本稿では、書き言葉のデータを対象としているので、「誤用」とした。

## II 先行研究

### 1 日本人学習者の「理由」を表す接続詞の使用の特徴

Fujiwara (2003) は、CEJL (the Corpus of English by Japanese Learners Project) を用いて、日本人学習者は理由を表す文では because ('cause) や so を過度に使用することを示した。また、同じ「理由」を表す接続詞 as は逆に過少使用される傾向があることを指摘している (Fujiwara, 2003 : 97)。(表 1 は Fujiwara (2003) による<sup>1)</sup>)

表 1 CEJL と FLOBROWN における理由結果の接続詞や前置詞のトップ10

| CEJL                 | N   | % s   | FLOBROWNES        | N   | % s  |
|----------------------|-----|-------|-------------------|-----|------|
| <i>so (that)</i>     | 72  | 48.0  | <i>because</i>    | 207 | 23.7 |
| <i>because/cause</i> | 61  | 40.7  | <i>as</i>         | 184 | 20.5 |
| <i>therefore</i>     | 5   | 3.3   | <i>thus</i>       | 102 | 11.7 |
| <i>for</i>           | 4   | 2.7   | <i>since</i>      | 83  | 9.5  |
| <i>as</i>            | 3   | 2.0   | <i>because of</i> | 60  | 6.5  |
| <i>thus</i>          | 3   | 2.0   | <i>so (that)</i>  | 60  | 6.9  |
| <i>now that</i>      | 1   | 0.7   | <i>reason why</i> | 50  | 5.7  |
| <i>for</i>           | 1   | 0.7   | <i>therefore</i>  | 47  | 5.4  |
|                      |     |       | <i>due to</i>     | 19  | 2.2  |
|                      |     |       | <i>somehow</i>    | 19  | 2.2  |
| Total                | 150 | 100.0 | FLOBROWNES        | 831 | 94.6 |

Fujiwara (2003) は日本人学習者の because と so (that) の過度使用は、'A because B'を単純に'B, so A'と置き換えることから起きるものと分析している。また母語話者では because と並んで使用頻度が高い as が日本人にはあまり使われていない点も特徴的であるとしている。

この研究では、日本人学習者は形式と機能の複雑な関係を、1対1対応で単純化する傾向があり、because や so の過度使用につながっているという分析がなされているが (Fujiwara, 2003 : 100)、個々の文が詳しく吟味されてるわけではなく、文の中の because の出現位置など、日本人学習者に顕著な because の使用傾向については触れられていない。

### 2 日本人学習者の because の使用傾向

Sugiura (2002) は、日本人英語学習者のコロケーション知識の傾向を分析し、学習者はコロケーション知識が少ないが故に、限られた種類のコロケーションを過度に使用する傾向を指摘している (Sugiura, 2002 : 316)。これは Fujiwara (2003) によって指摘された、日本人学習者の because や so (that) の過度使用の原因にも共通するものと考えられる。

また Sugiura (2002) は「日本人学習者は不必要な等位接続詞を文頭に置く」(Sugiura, 2002 : 315) という点も指摘している。これは、日本語において「だから」「そして」「しかし」などの接続詞が通常文頭に置かれることが多いという特徴が、英語に移転 (干渉) しているものとしている。しかし、Sugiura (2002) は従属接続詞の文頭使用については言及していない。

投野 (2007) は、JEFLL コーパスを用いた日本人の中高生の接続詞の発達分析の中で中高校の because の使用頻度の高さに言及し、「原因の意味を持つ BECAUSE を学習の初期の段階

で使用するのには容易には思えないだけに、意外であり、興味深い」と述べている。また、中学生、高校生ともに、接続詞を文頭で用いる傾向があることや、学習が進むにつれて文頭に用いる接続詞が減少する傾向があるという点も指摘しており、このことをふまえた中学、高校での指導法について、「書くことを中心とした自己表現活動をもっと授業に取り入れ、大文字で始まる Because が多用される場合は、その直前の文のピリオドを消し、b を小文字に直して連結させるなどの指導を繰り返し行う」などの提言を行っている（投野、2007：93）。一方でこの研究では、「高頻度の接続詞を量的に示したが、誤用の傾向やその原因等については調べることができなかった。」としている（投野、2007：94）。

### Ⅲ 研究

#### 1 調査課題

先行研究では、日本人学習者が because 等の特定の接続詞やコロケーションを過度に使用することや、接続詞の文頭使用の傾向などが明らかにされている。またそれらは日本語から何らかの転移（干渉）を受けていることが原因の1つではないかということも予測されている。しかし、具体的な使用傾向や誤用の原因については十分に考察されてきたとは言えない。

そこで本稿では、日本人学習者コーパスと母語話者コーパスを比較し、以下の観点で調査を進める。

1. 日本人学習者が because を文頭で使用する傾向の原因として、
  - (1) 通常後置される because 節を文頭に置く傾向が母語話者と比べて顕著ではないか
  - (2) Because で始めて従属節だけで文を終える誤用(以下「従属節単体文」)が顕著ではないか？
2. 母語干渉による特徴的な使用傾向や誤用が見られるのではないか？

#### 2 使用コーパスデータについて

##### (1) 日本人学習者コーパス

日本人初級学習者の言語産出データとして、Japanese EFL Learner (JEFLL) コーパスを使用した。全国の中学・高校教員によって集められたもので、全ファイル数（作文件数）は10,038件、総語数は669,304語（本調査の分析時点）であった。（2019年9月現在、JEFLLホームページ上の表記は「約700,000語」。）生徒に与えられた作文のテーマは大きく論説文と叙述文に分けられる。作文は授業時間内の20分間で行われ、一定の指示文とモデル英文が提示された。辞書の使用は許されたが、どうしても英語にできない部分は日本語で書いてもよいこととされた。

##### (2) 母語話者コーパス

日本人学習者の because の使用と比較対照するために、母語話者のコーパスを用いた。使用したコーパスは、米国英語の BROWN コーパス、英国英語の LOB コーパスの2つである。

BROWN コーパスは、Brown 大学の W. N. Francis と Henry Kucera によって、1961年か

ら1964年にかけて作られたものである。1961年刊行の2,000のテキストから構成され、総語数は約100万語である。LOBコーパスはBROWNコーパスの英国版とも言えるもので、1970年にGeoffrey Leechにより着手され、1978年にStig JohansonとKnut Hoflandによって完成されている。Brown Corpusと同様、総語数は100万語である。いずれも、新聞・雑誌等の15のカテゴリーを元にした、書き言葉のコーパスである。

### 3 結果

#### (1) 抽出データの総数

JEFLLコーパスからbecauseを含む文を抽出した結果、中学校2,014件、高校2,050件あった。この中から、"Because."とだけ書いて終わっているものや、becauseで始めているがそれ以外は全て日本語の単語の羅列になっているもの、無意味な単語の羅列と思われるものなどはデータから除外した。この結果、本稿で吟味したbecauseを含む文の総数は、中学校1,960件、高校2,007件である。またBROWNコーパス、LOBコーパスにおけるbecauseを含む文の数は、それぞれ880件と771件であった。

#### (2) 文頭にBecauseを用いる文の数の比較

日本人学習者がbecauseを文頭に置く傾向は母語話者のそれと比べて、どれほど顕著なのだろうか。表2、表3は、JEFLLコーパスとBROWNコーパス、LOBコーパスからbecauseが使われた英文を抽出し、実際に1文1文その用法を確認しながら分類した結果である。投野(2007)がJEFLLコーパスにWordSmithを用いて抽出したbecauseの出現数(投野, 2007: 92)とは異なっている。

表2 日本人学習者のbecause出現回数とその位置

| becauseの出現位置 | 中 学   |       | 高 校   |       | 合 計   |       |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|              | 回数    | %     | 回数    | %     | 回数    | %     |
| 文頭           | 1,495 | 76.3  | 1,239 | 61.7  | 2,734 | 68.9  |
| 文中           | 465   | 23.7  | 768   | 38.3  | 1,233 | 31.1  |
| 合計           | 1,960 | 100.0 | 2,007 | 100.0 | 3,967 | 100.0 |

表3 BROWN, LOBにおけるbecauseの出現回数とその位置

| becauseの出現位置 | BROWN |       | LOB |       | 合 計   |       |
|--------------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|
|              | 回数    | %     | 回数  | %     | 回数    | %     |
| 文頭           | 72    | 8.2   | 56  | 7.3   | 128   | 7.8   |
| 文中           | 808   | 91.8  | 715 | 92.7  | 1,523 | 92.2  |
| 合計           | 880   | 100.0 | 771 | 100.0 | 1,651 | 100.0 |

日本人の中学・高校の学習者においては、それぞれ7割以上、6割以上の文がbecauseを文頭で使用しているのに対し、英語母語話者では文頭にbecauseを使用する例は、BROWN, LOB共に1割に満たないという、非常に対照的な結果である。先行研究より、日本人学習者のbecauseの文頭使用の過度な傾向は指摘されているものの、母語話者と比較してこれほど顕著な差があることは予想以上であった。また、becauseが文頭に置かれた文の用法をさらに詳細に分類してみると、以下のようなデータを得た。

## (3) Because の文頭使用の内訳

日本人学習者が文頭に Because を置く傾向の原因をさぐるため、JEFLL コーパスの Because で始まる文（中学 1,495 件、高校 1,239 件）を以下の①～④の4つの視点でさらに分類した。

## ①正しい用法の文：中学 8 件、高校 42 件、計 50 件

Because で始まる従属節が前置され、主節が後置されているもの。（文の形が成立していれば、語法上の不自然さは検討の対象とはしていない。）

- a. Because I want to practice basketball at my home, I want to buy a basketball. (中)  
b. Because my breakfast is bread, I always drink milk. (高)

## ②等位接続詞との混用や記号等のミス：中学 51 件、高校 54 件、計 105 件

従属節と主節（と思われるもの）は揃っているが、主節の前に不必要な等位接続詞が置かれていたり、主節と従属節の位置が逆転していたりするなど、統語上のエラーを含むもの。

- a. \*Because I have to go school at 7:30, and I get up 7:00 every morning. (中)  
b. \*Because I want to be a actor in the future so I have to learn.  
c. \*Because, I [JP あきる] rice, I eat rice every day.

## ③「従属節単体文」：中学 1,306 件、高校 1,063 件、計 2,369 件

Because で始まり、主節を伴わずにいきなりピリオドで終わるもの。

- a. \*Because a camera is too expensive. (中)  
b. \*Because I was busy. (高)

## ④その他：中学 130 件、高校 80 件、計 210 件

言いたいことは想像できるが、because を含む文の本来の構造が意識されていないもの。

- a. \*Because he always kick lana But he kicks If lana do something bad. (中)  
b. \*Because, I love gonta and I will bring money Because money is my [JP トレジャー]. (高)

これらの結果を基に、表 2 を改訂したものが以下の表 4 である。

表 4 日本人学習者の because 節の出現位置とその回数（改訂版）

| becauseの出現位置   |           | 中 学   |       | 高 校   |       | 合 計   |       |
|----------------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                |           | 回数    | %     | 回数    | %     | 回数    | %     |
| 文頭<br>(従属節の前置) | ①正しい使用    | 8     | 0.4   | 42    | 2.0   | 50    | 1.3   |
|                | ②等位接続詞等ミス | 51    | 2.6   | 54    | 2.7   | 105   | 2.6   |
|                | ③従属節単体文   | 1,306 | 66.7  | 1,063 | 53.0  | 2,369 | 59.7  |
|                | ④その他      | 130   | 6.6   | 80    | 4.0   | 210   | 5.3   |
| 文中（従属節の後置）     |           | 465   | 23.7  | 768   | 38.3  | 1,233 | 31.1  |
| 合計             |           | 1,960 | 100.0 | 2,007 | 100.0 | 3,967 | 100.0 |

because の用法を曲がりなりに理解し、主節と共に使おうとしているものは、表4の中の①②及び「文中（従属節の後置）」である。また特に顕著な数を示しているのは③「従属節単体文」である。中学では because を含む文の7割近く、高校でも半数は「従属節単体文」となっている。

主節と従属節がそろっている文だけで because 節の前置、後置の数を比べたものが以下の表5である。

表5 主節・従属節がそろった文中での because 節の出現位置

| becauseの出現位置   |           | 中 学 |      | 高 校 |      | 合 計   |       |
|----------------|-----------|-----|------|-----|------|-------|-------|
|                |           | 回数  | %    | 回数  | %    | 回数    | %     |
| 文頭<br>(従属節の前置) | ①正しい使用    | 8   | 1.5  | 42  | 4.9  | 50    | 3.6   |
|                | ②等位接続詞等ミス | 51  | 9.7  | 54  | 6.3  | 105   | 7.6   |
| 文中(従属節の後置)     |           | 465 | 88.8 | 768 | 88.8 | 1,233 | 88.8  |
| 合計             |           | 524 | 100  | 864 | 100  | 1,388 | 100.0 |

主節と従属節のそろった文だけで見る限り、because 節の前置(①と②)の割合の合計は11.2%、後置の割合は88.8%であり、その比は母語話者のそれ(表3)と大きな差はない。また because 節の前置の割合は学年が上がっても全く変わってはいなかった。

#### (4) その他の特徴

日本人学習者のデータを分析するうちに気になったのは、because の直後に不必要なコンマを打った文が非常に多いことである。その数は、中学生の書いた文1,960文中234件(11.9%)、高校生の文2,007文中118件(5.9%)であった。学年が進むにつれて半減しているとはいえ、英語の表記上本来あってはならないものであるだけに、顕著な特徴であると言えよう。

a \*I won't use OTOSHIDAMA this year because, Maybe I'll have no money next year.  
(中)

b \*Because, the most important thing is my life. (高)

## IV 考察

日本人学習者が接続詞を文頭に用いる傾向は先行研究でも指摘されてきた(Sugiura, 2007, 投野, 2007)。本稿ではその頻度を母語話者と比較することで、傾向の過剰さを改めて確認することができた。そしてそれは、調査課題1(1)で挙げた「because 節の前置」が理由なのではなく、調査課題1(2)で挙げた「従属節単体文」の多さがその原因であることがわかった。主節と従属節のそろった文だけを抽出して because 節の位置を母語話者と比べれば(表3と表5)、前置・後置の割合に大きな差はなかった。

投野(2007)は「学習が進むにつれて文頭に用いる接続詞が減少する」(投野, 2007: 93)と述べているが、その理由は「従属節単体文」の数が減少することが理由であり、because 節の前置の割合は学年が上がっても全く変わってはいなかった。高校生になると「従属節単体文」

の数は減っているとはいえ、それでも全データの半数以上(53.0%)を占めていた。また、because の直後に不必要なコンマを打つ傾向は、日本人に顕著なエラーとして注目に値する。

以下にこれらの使用傾向や誤用の原因について、教科書インプットの影響の観点から2点、日本語からの母語干渉の観点から3点考察する。

## 1 教科書インプットの影響の観点から

### (1) 学習者がbecauseを好む理由

英語で理由を表す接続詞には本来いくつもの種類が考えられるが、日本人中高校生はbecauseを過度に使用する傾向が見られる。この原因として、Sugiura (2002) の「日本人英語学習者のコロケーション知識は非常に限られており、それ故に限られた種類のコロケーションを過度に使用する」(Sugiura, 2002 : 316) という指摘は実を射ていると思われる。

中学校の教科書(6社)を調べてみると、理由を表す従属接続詞はbecauseだけである。as や since 等の語は学習するが、比較表現や完了形の中で使用されるのみで、理由を表す用法は教科書には登場しない。投野(2007)は「原因の意味を持つ BECAUSE を学習の初期の段階で使用するのには容易には思えないだけに、意外であり、興味深い」と述べているが、学習者は他に知らないからbecauseを使っているのである。高校では理由を表す様々な接続詞を学習するが、Fujiwara (2003) が指摘するように、「日本人学習者は形式と機能の複雑な関係を1対1対応で単純化する傾向」(Fujiwara, 2003 : 100)があるため、中学校で学んだbecauseが好まれ続けるものと思われる。

### (2) 「従属節単体文」の過剰使用の理由

Becauseで始まり従属節だけで文を終える「従属節単体文」は、"Why?"に対する応答文としては有効である。従って会話文の多い中学校の教科書ではこうした文が数多く含まれている可能性は高い。それらの文に接した学習者が、その用法を過度に一般化し、文を書く際にも影響を受けているということは十分考えられることである。そこで、中学校の教科書(6社)からbecauseが含まれる文を全て抽出し、その用法を調査した。結果は表6の通りである。

表6 中学校教科書におけるbecauseの用法

|     |                          | A社 | B社 | C社 | D社 | E社 | F社 | 計   | %     |
|-----|--------------------------|----|----|----|----|----|----|-----|-------|
| 文頭  | Whyに対するBecause(従属節単体文)   | 5  | 3  | 5  | 0  | 6  | 4  | 23  | 19.2  |
|     | 従属節の前置 (Because A, B.)   | 1  | 1  | 0  | 1  | 1  | 3  | 7   | 5.8   |
| 文中  | 従属節の後置(B because A.)     | 7  | 12 | 16 | 18 | 8  | 14 | 75  | 62.5  |
| その他 | because of 名詞句           | 1  | 3  | 3  | 1  | 1  | 2  | 11  | 9.2   |
|     | It/That/This is because節 | 1  | 0  | 0  | 0  | 0  | 3  | 4   | 3.3   |
| 合計  |                          | 15 | 19 | 24 | 20 | 16 | 26 | 120 | 100.0 |

中学生が接するbecauseを含む文の約5分の1(19.2%)が"Why?"に対する受け答えであり、「従属節単体文」となっている。もちろん、会話文でこれらの文が使われることに何ら異論はない。しかし、6社中5社で、学習者が最初に接するbecauseが「従属節単体文」であり、少なくとも会話文中心の1年生の間は、「従属節単体文」の中で"Because"と接し続けている。



## (2) 不必要な等位接続詞を用いる傾向

日本人学習者が because の使用に関して日本語の干渉を受けているもう一つの例として、because 文で主節を後置する際、主節の前に不必要な等位接続詞を置く傾向が挙げられる。具体的には以下のような文が見られた。

a. \*Because I have little time to eat breakfast, and I like food which I can eat early.

(中学)

b \*Because I can't get up early, so sometimes I have to have breakfast in the train.

(高校)

c. \*Because its smell is too strong, therefore I eat that in holiday. (高校)

これら不必要な等位接続詞は、日本語で理由を述べて主節につなげる際に用いる「～ので／～だから」を英語で表現したものと推測できる。日本語の表現をそのまま英語に置き換えたことが、不必要な等位接続詞の使用へとつながったと考えられる。上記 a の文の場合、筆者の意図は以下のようなものであったと思われる。

a' (なぜなら) 朝食を食べる時間がないので, (だから) 早く食べられる食べ物が好きだ。

このように主節の前に and, so などが置かれている文は、中学校で 1960 文中 26 文 (1.3%), 高校で 2007 文中の 31 文 (1.5%) 見られた。数的に大きなものではないが、学年が進んでも減らない上に、わずかながら増加している。中学校で身についたエラーが固定化 (化石化) している可能性がある。

## (3) 接続詞後の句読点について

because の使用について学習者が日本語からの干渉を受けていることを示す 3 つめの例として、because の直後に不必要なコンマを使用する傾向が挙げられる。日本語では多くの接続詞は慣習的に直後に読点 (、) を伴う (「そして、」「しかし、」「なぜなら、」など)。この日本語の接続詞の用法が because の直後にコンマを不必要に打つ傾向の原因になっているということは容易に推測できる。

接続詞 but の直後にもコンマが使われる例が多く見られる<sup>2)</sup>ことを考え併せれば、学習者が接続詞の用法に関して日本語の干渉を大きく受けていることは確実であると言える。

## V まとめと提案

以前から日本人学習者が様々な接続詞を文頭に置く傾向は指摘されていた (Sugiura, 2002, 投野, 2007)。本稿では、because が文頭に置かれる頻度を日本人学習者コーパスと母語話者コーパスとを比較することで、日本人学習者の過剰とも言える使用傾向を確認した。

またその原因は「従属節単体文」の使用が異常に多いことが原因であることがわかった。これは、中学校段階で、学習者が教科書や指導者から得るインプットに会話体のものが多く、"Why?"の受け答えとしての"Because...."を過度に一般化してしまうことが原因となっている可

能性がある。また、日本語における「なぜなら～だからです。」の用法から来る母語干渉の可能性についても指摘した。母語干渉については、不必要な等位接続詞を主節の前に置く傾向や *because* の直後に不必要なコンマを用いる学習者が多いことから推測できる。

この従属節単体文の過剰使用への対策として、教科書インプットの改善の視点及び教室における教師の指導の改善の視点から、以下の提案を行いたい。

## 1 教科書インプットの改善

教科書における *because* の初出は、"Why?"に対する受け答えではなく、文中に使用される従属接続詞としての用法をもって初出とする。また "Why?"に対する受け答えとしては、"Because"で始まる「従属節単体文」だけではなく、接続詞を伴わない文や不定詞の副詞的用法の文の一部を用いるなど、多くの答え方があることを明示的に示す。

"Why?"に対する受け答えに *because* を用いる際も、できるだけ、"That / It is because..."のように、書き言葉にも汎用できる表現とする。(現行の教科書でこの表現が見られたのは6社中2社のみである。)

さらに、各教科書の巻末に掲載されている語彙索引における *because* の訳語については、日本語の「なぜなら～だからです」との混同を避け、母語干渉を引き起こさないような工夫が望まれる。訳語から「なぜならば」という表記を削除し「～だから、なので」という表現のみに統一することも一案である。

## 2 教師の指導の改善

指導者である日本人英語教師の意識改革は必須である。口頭によるコミュニケーションに重点を置いた授業を指向するあまり、学習者が書き言葉にまで "Because"で始まる「従属節単体文」を用いることに違和感を感じなくなっている教師も多いのではないだろうか。このことは、データの示す従属節単体文の数の多さ自体が根拠と言える。私自身、生徒の作文を添削するALTからこの傾向を指摘されたときに、改めてはつとしたものである。

具体的な指導としては、投野(2007:93)が指摘するように、書くことを中心とした自己表現活動をもっと授業に取り入れ、大文字で始まる *Because* が多用される場合は、その直前の文のピリオドを消し、*b* を小文字に直して連結させるなどの指導を繰り返し行うことも大切である。また、生徒が "Because"で始まる「従属節単体文」を書いていた場合、その前に "That is / It is"を書き加え *b* を小文字にする指導も必要であろう。

口頭によるコミュニケーション活動においても、"Why?"に対する受け答えとして、"It's / That's because..."や "That's why..."などの表現を計画的に導入し、慣れさせておくべきであろう。胡子(2011:98)は、これらの表現を中学校1年生にも使わせており、"Because..."は話し言葉の時だけ使える表現であることを明示的に伝えると述べている。

特に小学校外国語活動・外国語科においては、「Whyと聞かれたら *Because*で始めるんだよ」などという、1対1で単純化するような指導は厳に慎むべきである。初級学習者であればあるほど、例えば "Why do you like chocolate?"に対して "It is delicious. I like sweets."などのように、形式よりも相手に伝えたい内容の方に重点を置いたコミュニケーションを目指していきたい。

また指導者は、英語の接続詞の学習に当たっては母語干渉が起こりやすいということを自覚しておく必要がある。接続詞の後の不必要なコンマや、主節の前の不必要な等位接続詞の使用が見られる際は、その都度適切に指導を行うことで、エラーを固定化させないよう留意したい。

以上、日本人学習者の because の使用についてその誤用や使用傾向を分析し、初期の段階の指導の在り方や教科書によるインプットの在り方について提案を行った。各教科書の編集や小・中・高等学校の実際の教室での指導の参考となれば幸甚である。

## 注

- 1) パーセントの数字は小数点以下2位を四捨五入した数である。以下も同様である。
- 2) and, but, because の直後のコンマの数と割合は以下の通りである。but については、直後のコンマが高校生になっても顕著である。

表7 JEFLLにおける and, but, because の直後のコンマの数と割合

|         | 中学校                | 高校                 |
|---------|--------------------|--------------------|
| and     | 112 / 8336 ( 1.3%) | 132 / 9162 ( 1.4%) |
| but     | 640 / 5825 (11.0%) | 440 / 4098 (10.7%) |
| because | 234 / 1960 (11.9%) | 118 / 2007 ( 5.9%) |

## 参考文献

- Fujiwara, Y. (2003). The Use of Reason-Consequence Conjuncts in Japanese Learners' Writing English. *English Corpus Studies*, 10, (pp.91-104).
- Sugiura, M. (2002). Collocational Knowledge of L2 Learners of English: A Case Study of Japanese Learners. *English Corpus Linguistics in Japan*, (pp.303-323): NY: Brill Rodopi.
- 笠島準一, 関典明他 (2015). 『NEW HORIZEN English Course 1～3』. 東京: 東京書籍.
- 胡子美由紀 (2011). 『英語授業ルール&活動アイデア 35』. 東京: 明治図書.
- 東後勝明他 (2015). 『COLUMBUS21 ENGLISH COURSE 1～3』. 東京: 光村図書.
- 投野由紀夫 (2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス』. 東京: 小学館.
- 新里眞男, 佐藤寧, 高梨芳郎, 卯城祐司他 (2015). 『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1～3』. 東京: 開隆堂.
- 根岸雅史他 (2015). 『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1～3』. 東京: 三省堂.
- 松本茂他 (2015). 『ONE WORLD English Course 1～3』. 東京: 教育出版.
- 矢田裕士, 吉田研作他 (2015). 『TOTAL ENGLISH 1～3』. 東京: 学校図書.

## The Tendency of the use of 'BECAUSE' in the writing of Japanese Novice Learners of English

TATSUKAWA, Kenichi

### Abstract

As Tono (2007: 91) or Fujiwara (2003: 97) pointed out, Japanese novice learners of English prefer to use 'because' as a subordinate conjunction for 'reason.' However, different tendencies or misuse of 'because' are very often seen in their writing. In this study, the tendencies of Japanese novice learners' use or misuse of 'because' are investigated by comparing Japanese learners' corpus to native English speakers' corpuses. Also the causes of the tendencies are analyzed from two different perspectives, the influence of the textbooks and the Japanese language transfer. Lastly, more effective ways of teaching the usage of 'because' for Japanese novice learners are suggested.

【 Key words】 Japanese Novice Learners, 'because', subordinate conjunction, corpus